KENKENにゅーすNo.13 for people studying of hearing difficulties

新着任者研修を通して考える「聴覚特別支援教育」とは

研修「聴覚特別支援学校の授業」

今年も多数の新着任の先生方が本校に来られ、熱心に新着任者研修を受けていただいています。みな、初めての聴覚特別支援学校に一日でも早く慣れようと頑張っていらっしゃる、その姿を見て、こちらも聴覚特別支援学校での経験を通して学んだこと身に付けたことをなど、そのノウハウを新たに伝えて行かなくては…と教材作りに励む大きな原動力になっています。ありがとうございます。

さて、５月に行った新着任者研修として「聴覚特別支援学校の授業」というのをやりました。

ｼﾐｭﾚｰｼｮﾝ「地域の学校での難聴児」

今回の研修の中では初めての試みとして「地域の学校に通う難聴児」の立場をシミュレートしてみました。方法としては、口の形を読み取らせないために**「マスクをしたまま授業をする」「マイクを口に近づけて話をする」「黒板に板書をしながら授業内容を話す」**。また、難聴児の聞こえにくさを再現するために**「小声で話す」「ボイスチェンジャーを使って聞きとりにくい声にする」**など、地域の学校に在籍している難聴児の聞こえを体験してもらうための工夫を行ったうえで授業を始めました。

ところが、生徒役をした新着任の先生方は最初戸惑い、最初のころは何度も聞き返すなどなかなか授業が進みませんでしたが、驚いたことに次第に慣れて、こちらの指示がだんだん伝わるようになってきました。これはどういうことかと体験が終わった後に参加された先生方に感想を聞いてみると「周囲の動きを見てカンと先読みをすることで何とか授業についていけた」とのことです。まさに、自分自身が地域の学校でどのようにやり過ごしてきたのかそのままで、シミュレーションとしては大成功でした。

また、先生役をしていた私にも心理的な変化が表れてきて、そのことに自分自身が驚きました。

最初、話がなかなか通じなくてイライラしてきたので、聞き返されたら声を荒げるなど「演技」をしていたつもりでした。ところが、次第に慣れてカンを働かせて授業について来れる生徒役が現れるにつれて、まだついて来れない生徒役に対して「早くしろ」「何やってんだ」などの「本気」の悪態が増えてきました。その生徒役が聞こえづらい環境にあるということを自分自身忘れてしまっていたのですね。自分自身も聞こえない立場であるのにものにもかかわらず。

このシミュレーションは時間にしてわずか５分程度のものでしたが、それでも体験した生徒役からの感想は「精神的にしんどい」で一致していました。これを朝登校してから夕方下校するまでフルに脳を働かせなくてはならない環境に置かれている地域の難聴の子どもたちの心はいかばかりか。

指導する側も、指示したとおりに生徒が動いているのを見慣れていくうちに「自分の指示はちゃんと伝わっている」と思い込んだり、ひいては相手が聞こえていないことを忘れてしまいがちです。気が付いたら、ちゃんと理解しているかどうか確認を怠っていたり、聴覚に必要な配慮が漏れたまま授業が進行しているケースも見られます。

聴覚障害児童生徒に対する配慮

以上のことを踏まえて後半は聴覚障害に対する配慮をフルに使った「聴覚特別支援学校の授業」で行いました。**「他の生徒との意見交換を活発にするために座席配置を見やすい『馬蹄形』にする」「板書ではなくパワーポイントを駆使し、できるだけ背中を向けない」「字幕付きの動画を有効に使う」「照明に配慮して、生徒側から見て逆光にならないようにする」**など…その結果、生徒役の先生方からは「見やすい」「わかりやすい」などの声が上がりました。